籠の中の魔術師

トキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

籠の中の魔術師

【Ｎコード】

Ｎ０８９３Ｖ

【作者名】

トキ

【あらすじ】

かつて世を滅ぼそうとして英雄に封じ込められた、不老不死の魔術師。その元を、一人の女が訪れた。

この暗く湿った洞窟の奥に、ご丁寧にも窮屈な檻に詰め込まれた状態で封じ込められてから、一体どれほどの年月が経ったのだろうか。

誰かと言葉を交わすどころか、人の姿を見たことさえも最後がいつだったのか、それすらも記憶が曖昧で思い出せない。

……いや、最後に目にした人物のことは、覚えている。

あの男――俺をこんな惨めな境遇に突き落としたあいつの顔だけは、今でもはっきりと思い出すことができる。湧き上がる憎しみと共に。

だが、あれから流れた時の数だけは、昼も夜もないこの暗闇の中では、知ることができないでいた。

とにもかくにも、久し振りに俺が目にしたその人物は、目が合うなり、赤い唇を引き上げたのだ。

「あなたを、やっと見つけたわ」

まだ若い女だというのに大した度胸だと、面には出さずに感嘆する。

俺のこの醜い姿を目の当たりにして逃げ出さないとは――。

閉じ込められた檻の狭い隙間から、目を眇め、相手を値踏みするかのような視線を投げ掛けた。

どこか他人を寄せ付けない鋭い雰囲気を全身に漂わせた、痩身の女だ。

その手に握られた洞窟の暗闇を照らすランプに、白い顔がぼんやりと浮かび上がって見える。
笑みの形を取っているというのに、感情が欠落した作り物のようにさえ見え、冷たい印象を受ける。

「俺に何の用だ、お嬢さん」

揶揄するような口調で話しかければ、女はいかにも年頃の娘らしく、小首を傾げる。なぜそのようなわかりきったことを問うのかとでも言いたげに、その闇色の瞳を瞬かせ、長い睫越しに俺を見上げた。

「あなたをここから助けるために来たの。そんな狭いところに閉じ込められているのは、もう飽き飽きしたでしょう？」
「そうでもないけどな。それなりに考えることだってあるもんだ。死ぬことのない身の俺からしたら、例え百年だってほんの瞬きしている程度の時間と変わらない」
「そう」

予想していた答えだったのか、まるで興味すらない様子で、女はただ軽く顎を引く。

「なら、その永遠に続く時間の一瞬くらいあたしにくれても、大した損失にはならないわよね？　不老不死の魔術師さん」

わざわざこんな居心地の悪い洞窟の奥までやって来るほどだ、俺の正体を知り、そしてその俺を求めてのことだろう。
だから女の口から『不老不死の魔術師』と出たことには、今更驚きはしなかった。
それよりも、この人並み外れた精神力を持つ女が一体何を望むの

かに深い興味を覚え、俺は無意識のうちに短く返していた。

「……何が望みだ？」

「全ての終わり」

「何だと？」

「このバカバカしい世界を壊して欲しい、と言ったのよ」

「へぇ、若いわりに、随分と世を悲観し過ぎじゃないか？　アンタくらいの年頃の女なら、友人と下らない会話に興じたり虚栄心のために身を飾りたてたり男に抱かれたり、何かと楽しいことも多いだろうに」

俺の露骨に見下した言葉の数々にも、女は気分を害することもなかった。ただ小さく肩を竦めて見せる。

「そんな女もいるにはいるけどね。残念ながら、あたしは違う。あたしみたいに産まれてすぐに路上に捨てられた女なんて、毎日が惨めなだけよ」

「親に捨てられたのか」

相手を思いやるような優しさなど微塵も含まない、ただ事実を確認するだけの淡々とした問いに、女も眉ひとつ動かすことすらなく首肯した。

「そうよ、このつまらない痣のせいで」

言うなり俺に背を向け、服の袖を肩から腰まで、音もなく落とした。背を覆う漆黒の髪を、首筋まで掻き上げる。

そこに現れたものに、俺は、目を細めた。

「なるほどな」

露わになった白い肌にくっきりと、翼のような形の黒い痣が浮かび上がっていた。
ただしそれは、半身にのみだ。

黒の片翼。
その姿はまるで――。

「堕天使、だな」

俺の呟きに、女は何一つ反応しなかった。
ただ元通りに服を直し、絡まった髪を指で梳いて整えると、再びこちらに身体を向ける。そして何事もなかったかのように、淡々と続けた。

「あたしの願いを叶えることは、あなたにとっても、悪い話ではないでしょう？　だって、それをしようとして失敗して、『そんな姿』にされた挙句にここに囚われたのだから」

クスリ、と嘲笑う女に、俺は初めて冷ややかな目を向ける。
かつてこの視線を受けて、表情を強張らせなかった者はいなかった。けれど、この女は違った。気圧されることすらなく、まっすぐに視線を押し返す。
そこで俺は、そのことに気付く。

――違う。度胸があるだとか、そんなものじゃない。
この女の心は、既に何も感じていないのだ。
喜びも、悲しみも、そして恐怖すらも。
だからこそ、今の俺を前にしても平然としていられるのだろう。
普通の人間なら、気が触れていたっておかしくないはずだ。

「あなたは、その卓越した魔術で、世界を消そうと企んだ。けれど、それは阻止されてしまった。あなたを捕らえた者――今の世では、英雄と呼ばれているわね。その英雄でさえも、あなたを殺すことはできなかった」
「残念ながら、死ねない身なんでね」
「……それに、永遠に若いまま。あなたのその皺ひとつない顔を見て、数百年も生きているおじいさんだなんて、誰も思いやしないわよ」

伸ばされた女の細い指が、慈しむように俺の頬を撫でる。こうして狭い空間に押し込められ、見動きひとつ取れない俺は大人しくされるがままだ。

「……あたしは、もうこの世界にうんざりしただけ。人と見た目が少し違うというだけで、偏見と差別の眼差しを向けられて、まるで汚物のように扱われて忌み嫌われる。悪魔と罵られ、石を投げられることにだってもう慣れたくらいよ。でも、あなたは？　あなたはあたしとは違う。身分もあった。それに知識も。こんなに綺麗な顔をしていて、永遠の時も手に入れた。世の中の人が望むもの全てを持っていたのに、一体何が不満だったの？」
「不満なんてない。ただ、虚しくなっただけだ。死ねないことが」

一度、そこで言葉を切り、愚かだった己を思い出す。

「あの時の俺は、本当に馬鹿だったと我ながら思うね。始めは、単なる興味本位だった。魔術にのめり込み、その呪術の存在を知った。不老不死になれたら、どんなに素晴らしいだろうと思った。そうなれば、失う物は何もない、そう本気で信じて疑いもしなかった」

自嘲気味な笑みを浮かべるが、女は身動ぎひとつしない。
先を促されていると判断し、俺は静かに続ける。

「でも実際は、その逆だった。確かに、時間はいくらでもある。やりたいことはいくらだってできるし、急ぐ必要すらない。だが、他の人間は違う。俺を残して時は流れる。歳を取らないことに気付かれてしまえば、長く一定の場所に留まることすらできない。気付けば常に、一人だった。結局、失ったもののほうが多かった。だから、全てを終わりにしようと思った。この世が無くなれば、俺もきっと消えることができる、そうだろう？」

ずっと沈黙を保ったまま静かに俺の話に耳を傾けていた女は、やがてぽつりと、『そうね』とだけ吐息交じりに囁いた。まるで年上の姉が、幼い弟を諭すような、そんな微笑みを浮かべて。
それに俺は、過ぎ去った時の記憶から『今』に引き戻された。
この女がこんな柔らかな表情（かお）を見せるのかと驚くと同時に、何かを酷く傷つけられたような、そんな不快感がふつふつと沸き起こり、思わず強く眉根を寄せる。そして女の視線を撥ね付けるように睥睨し、感情の籠らない冷ややかな口調で、問うた。

「……お前の望みを叶えるとしたら、代わりに何を差し出す？」
「あら、欲張りね。どうせすぐに望みどおりに消えてしまえるのなら、何を得ても意味なんてないでしょうに」
「それとこれとは話は別だ」

その存在を主張するかのように、身体の前で組んだ腕に押し上げられた豊かな胸に目を落とす。
長いこと女に触れることもしていなかったが、そんな人間らしい欲求を覚えたのも実に久し振りのことだった。
俺の本能的な考えを即座に読み取った女は、恥じらうことも怒る

こともなく、それをただ一笑に付しただけだった。

「できもしないことを考えたって滑稽なだけよ。もし今のあなたにそれができるなら、別にその程度のこと、何でもないけれど。でも、それよりももっと良いものをあげる。あなたがずっと望んでいるもの――自由よ」

「ここから出す程度で、俺に自由を与えたとは思うな。本当の意味での自由でなきゃな」

「もちろん、そうだわ。見つけたのよ、あなたがここに閉じ込められる時に奪われて、長いこと失っていたものを」

「――！　まさか……」

「ふふ、驚いた？」

初めて愛らしく笑い、女は、俺が閉じ込められた籠に指を掛け、岩の壁に開いた窪みからそっと下ろした。まるで小さな鳥を捕らえておくのに使われるような、小さな籠だ。それが今の俺に赦された空間の全てだった。

己の身体の前でその籠をまるで宝物のように抱え、女は、にっこりと屈託なく微笑んで見せる。

「きっと素敵なんでしょうね、五体揃った完璧な姿のあなたは。だってほら――首だけでもこんなに魅力的なんだもの」

「ああ、それは保障しよう」

俺はそう答え、唇の端を引き上げる。

頷けるものなら、そうしているところだ。

瞼を伏せ、かつて奪われた己の肉体へと思いを馳せる。

不老不死の俺を世界から葬り去る為に、『英雄』と崇め祀られた男は、俺の首を剣で落とし、小さな籠に詰め、魔術が扱えないようにと封印を施したこの洞窟に閉じ込めたのだった。

俺は、再び開いた瞳に燃えるような怒りと憎悪を滾らせ、脳裏に浮かんだ顔を睨み付ける。

「連れて行ってくれ、俺の身体の元へ」

そして止まっていた俺の時は、再び動き出した――。

＞ ＥＮＤ ＜

（後書き）

とにかくひたすら暗い雰囲気の物を書きたくなって書いてみました（^^;）

身体がない人の感情描写と言いますか、仕草が限られているので、そのへんがけっこう難しかったです。

読んで下さった方、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0893v/

籠の中の魔術師

2011年7月25日07時24分発行